

岡山の著名俳人

上 村 敦 之

―はじめに―

- (1) 対象を死没俳人に限った。(三十名)
- (2) 年代を十九世紀以降の生誕俳人とした。
- (3) 原則として一人一句の鑑賞に限った。
- (4) 原典を日本出版KK発行「岡山文庫―岡山の俳句」に拠った。
- (5) 素材を植物、鳥類に出来るだけ重点を置いた。
- (6) 経歴は簡略に、作品鑑賞を主眼にした。

① 赤木格堂(一八七九―一九四八)

子規晩年の高弟、現岡山市小串に明治十二年、赤木家の四男に生まれるが正嫡となる。明治三十五年早大文学部卒。参禅・仏語も学ぶ。代議士―山陽新報主筆―村長となる。

俳句は十八より始め、子規の「春夏秋冬」の代表作家となる。子規歿後、俳壇より身を引いた。昭和二十三年、生家で七十才で

歿す。なお筆者は、子規の「写生」に賛同せず、一義的写生に反撥した。代表句を掲げる。

深川は寒き処や桃青忌

桃青(芭蕉)は十一月下旬、数え年五十一才で歿した。この地の弟子の世話で数回にわたり庵主として半聖半俗の住居をしつ句作もした。或時は月見をし、又ある時は芭蕉を探賞もした。今年も陰暦十月十二日、深川芭蕉庵をしのんで句会をした。去来や其角、曾良や許六、多くの門弟が野菜を持ち寄っては師のために馳走をした。数百年のタイムトンネルをさかのほり、海風の吹きつける寒い深川の明け暮れを私も門弟に加わって思い起こしていた。

② 新免十五坊(一八七九―一九四二)

明治三十年初頭の「ホトトギス」全国一覽表に岡山で唯一名彼の名が載っている。新免陸之介が本名、大原町川上に明治十二年に生まれる。医者志し上京、三十一年子規と初対面、一旦帰郷又再上京して子規と行動を共にす。三十三年ごろ山梨県で医学と

並行して句作を指導、三十八年佐用町藤木某と結婚、その地で小学校教師へ。更に網走で校長へ昇進、後退職、昭和十一年以後は郷里の俳壇を指導。

裏庭の池に水なしみそざい

みそざいは大体山中に住むが時折里に出ては水をすくい飲むのを見かける。小型で全身茶色、いつも身体を動かし非常に美しい声で啼く。この句では、筆者の裏庭の池に殆ど水がない状態だが、よく見ていると、みそざいが美声をあげつつ僅かの水に頬をふくませている様を写実化している。

③ 大谷是空（一八六七—一九三九）

明治俳諧史研究家K氏は子規の親交家中、上位四位に受信者として大谷氏を挙げている。是空本名藤治郎は慶応三年現津山市山北に三男として生まれた。小卒後上京、後の一高に進みそこで二十年前後子規より強引な俳句入門を口説かれた。是空は俳人として業績は殆どないが、明治二十九年津山刊行の「是空俳話」は県下初の俳句評論として評価される。昭和十四年、七十七才歿、東京谷中に埋葬。

高い塀低い塀ある桜かな

都会の豪邸で長い長い塀がある。ある所では桜の枝が大きく顔を出し、他の所では全く顔を見せず、紅白の美しい枝の見事さを連想さす。津山の鶴山の桜あたりもその数四千本に及ぶと壮麗な石垣より更に枝を延ばすもの、逆に数年前に植樹した地表に近い

ものもある。

桜の豪華さと、その高低に関連して、紅白の桜の実体と幻想が読み込まれていて写真句として句柄の大きい佳句といえよう。

④ 妹尾雨燈（一八七四—一九四六）

徹底して添削で子規の教えを乞うた逸材である。本名吟一郎、現井原氏の酒造家の長男として明治七年正月に生まれる。岡山中学中退後、主として添削で諸芸道に精進する。国語、和歌、漢文、俳句、簿記、柔道、南画、生花等々である。俳句は岡山県に落帽会を組織、指導五十年に及んだ。昭和二十一年四月死歿。

鯛掛けて注連に栄えあり籠の上

戦前、戦後も二十年代までは各戸とにカマドがあり、主食、副食とも専らこれに頼った。ガス・電気の時代になって便利にはなった、食物の製作への謝恩の気持ちは中年以下の世代には乏しくなった。戦後は町中でも家のすべての所に神が祀ってあった。中でもカマドの上の荒神様は最も崇められた。正月が近づきカマドには無論注連をかけてあるが、「めで」鯛そこに供えられてシメが一段と栄光をました。「てーりーえ」のリズムは円滑である。

⑤ 志田紫琴（一八七六—一九四六）

県人でなく長く六高教官として俳界にあった人である。明治九年富山県に生まれ寺の息女志田氏と結婚改姓した。六高には明治四十一年着任、六高教授六人で六六会を組織した。内田百閒、星

島次郎らも指導した。大正初期には「淋しい彼が山茶花に来て黙って去ったよ」などの新傾向にもなじんだ。大正末、成蹊高、東大講師になり、昭和七年「東炎」に門下を参集した。一方、芭蕉研究で最初の文博となった。遺稿には「山萩」刊行。昭和二十一年富山の親戚で病歿した。その図書五千冊は富山県に寄付された。

木の股に薪懸け枯らす冬来たり

一読句意は明らかだが、木の股という股すべてに薪を置いて枯らすという冬寒の風情が冬の季節感を非常にリアルに描いている。木の股も新も自然の営為で、それを乾き切るという所に冬という冷凍の事象が適確に出ている。

⑥ 吉田寸草（一八八二—一九六五）

明治十五年一月、岡山市政津に吉田家の長男として生まれる。

岡中—六高—東大シナ文に進む。明治末六高国漢講師へ。（大正八年教授へ、以後四十数年在職）、戦中再び講師戦後も継続、昭和三十年退職。俳句は六六会の一員、素琴に師事。「懸葵」から「東炎」へ、「唐辛子」の選句し、戦後内藤吐と「早咲」で活躍、三十八年句集「東薇」刊。人物は淡々として風韻あり漢学者的風韻を持った。四十一年三月歿、西大寺広舎の寺に葬る。

土砂降りのあとしづかなる蟹ありく

海辺近い別荘地か、地軸を揺るがすような豪雨が降った。しかしそれも三十分程であとはからりと秋天が暗れ上った。家の一面

に割と広い砂地がある。見ると朱の色も濃いい平家蟹が先程の大雨のため出来た砂地の凸凹を乗り越え渚を目指して闊歩していく。動中静、喧後閑—これらの異種の静動界を見事に活写している。「しづかなる」の形容が傑出した。

⑦ 大森桐明（一八九九—一九四一）

明治三十二年三月岡山で大森家の四男として生まれる。本名留郎、六高—東大工学部卒後、東京毛織入社、後、福井高工、一高講師などに就く。俳句、六高時代素琴の指導を受け、「懸葵・常盤木」で新進作家として文名あがる。後、「草上」の同人になり、又多くの俳書を出した。更に素琴の「東炎」刊行時、吐天と共に双璧として活躍した。十五年句集「高原」を出し、翌十六年、四十三で歿した。その遺体は岡山より小平市の霊園に眠る。彼の句は知性に裏づけられた叙情詩の風情あり。

楳くべに起きて夜明けつ時鳥

杓子逆縦走黒部祖母谷温泉に下り一泊とある。近代的な温泉宿でなく、山小屋、ヒュッテのたぐいの仮寝。代り代りに、炬に楳をくべ暖気を取る。筆者の番が来て、五時前当たりか楳をしつかりくべた。丁度夜が白んで、樹間を縫って時鳥が曉の第一声を放った。「くべ、（夜）明るく、（時鳥）啼く」の連動が絶佳。

⑧ 福武枯木（一八八六—一九六九）

戦前の朝日の中等野球の歌の作詞者。明治十九年現矢掛町横谷の福武家の長男として生まれた。神宮皇学館卒業、大正三年母校

岡山中に赴任、「丘上会」という句会を作り、素琴、乙字に師事（岡山に枯木あり）と評された。大正十四年吉田冬葉の「頼祭」創刊に同人として加わり、又「草上・東炎」にも加わった。大正末より昭和にかけて妻・父を喪い、帰郷その後四十年自適、「唐辛子」の選句にも当たったが、四十四年八十四才で死す。その句風は温厚、清雅である。

夕霞どちら向いても山ばかり（退職して故郷に帰ると前書き）自分にも若年期には大志あり、エリート中学教師、多くの俳句結社の中軸等芸術學術運動に全力を尽くしてきたが今すべてを捨て去り故山に帰ってきた。一日畔に座ってあたりを眺めると夕もやかすみ、青灯赤灯など一つも見えず視野に入るのは山又山である。平易だが出色の心境句である。

⑨ 笠井栖乙（一八八八—歿）

明治二十一年高松町で笠井家の一人息子として生まれ本名誠一。関中、国学院大を経て、次の諸校に赴任、岡中・丸亀中・三次高女等。二十四年—二十九年関高校長。自適の中八十過ぐ。

俳句、父の影響もあったが、岡中丘上会で素琴指導以降である。枯木と五十年の親交を結んだ。更に「懸葵・常盤木」の重鎮となり、「石楠」にも投句、又「七味紗」選者、「東炎」にも参加、戦後「光芒」選者、二十九年「陣山抄」に自作を収めた。句には夏のもの多くロマン的情趣が濃いい。

西晴れて鈴鹿は暮るる花菜かな

岐阜中在職の頃の句でもあろうか、西方はまだ残照が明るく蒼空も望める、しかし、鈴鹿の高峰は日光もうすれ早暮色が濃いい。鈴鹿の望めるこの高原には菜の花が一面に咲き、晴色と暮色のはざまに一大パノラマを呈している。初中下の展望が視覚的把握に富み、リズムカルの句の中でも傑出した一句である。

⑩ 辻 濛雨（一八八五—歿）

小柄大声ずばり呼号する名物男、大人辻は明治十七年岡山市三股に生まれた。本名正士郎、高山齒科医院を出て、四十年帰郷開業。「無念五句集」という句集を蛇笏らの支援も得て出した。もとホトトギス系だが、反骨性はすべての局面に表れた。昭和初年、岡山県で前後にない全国的規模をもった俳誌「関の花」を刊行した。又格輩との親交は深く、戦中この主宰誌は中断、以後、齒科俳界いずれも最長老として不屈の道を邁進している。

春曉の園丁鶴を放ちけり

春の曙、動物園であらう、園丁がもう永年よくなじんだ飼鶴をさく外に放ったことだ。一年中狭いおりで飼われている鶴、春曉開園にはまだ間がある。放しても空高く飛翔する性はもう持たない。園丁の手足が鶴の翼と股と完全に調和している。飼鳥への愛情が句全体をおおい、白曉と白鶴が見丁にタイアップしている。冒頭の漢語と切れ字「けり」が見事に融和している。

⑪ 多田二夕居（一八八七—歿）

柔道三段—県下一、都々逸の名手、文武両道である。明治二十

年、岡山市二日市に横山姓で生まれ、後多田姓となる。明大卒。

俳句は格堂門、元来ホトトギス系、「自選俳句・日本俳句鈔」に投句。昭和に入ると「ゆく春」「岡山ゆく春俳句会」で躍動。濛雨との親交も六十有余年である。

しら波の闇にきそへる跡かな

笠岡市に属する白石島の無形文化財「白石踊り」を連想したい。

「しら波」と「闇」、「踊り」がそれぞれ連弾している。

渚に寄せる白波、それは月なき夜の闇と対照している。ところがぬば玉の闇に浮かび上る物がある。それは若い未婚者、人妻のしらじらと浮かぶ顔や脛である。白波・踊りの運動性月なき闇の静閑性、「おどりが闇にきそふ」という超個性的表現が、この句を孤島のおどりの持つ叙情性・哀愁を波音と共に表現している。

⑫ 中塚一碧樓（一八八六—一九四六）

名は直三、明治二十年玉島に、製塩業社の四男に生まれる。早大に進み同じ下宿に蛇笏がいて親交、後中退。四十一年「日本俳句」の巻頭句を飾り日本の存在となった。翌年碧梧桐と二十日間の俳三昧をする。四十三年碧樓氏と十五日間の俳三昧をし、この間「自選俳句」刊行、四十四年早大に復学、「試作」により自由律俳句運動開始、大正二年「はかぐら」刊、以後「海紅・第二句集」、大正末年より「朝・多摩川・芝生・一碧樓一千句集」を出した。昭和二十一年、東京で五十九才で歿した。

紫ばかりの朝顔が咲く工場住ひよ

工場の寄宿舎住居、棟割長屋で二階の小部屋が数十室続く。仕事の内容も単純な手工場で潤いはない。さて窓を利用して日避けをかねて朝顔を作り紐で軒先に這わすのだが、どうしたわけかどの家の花も皆紫色で白・紅の花は全くない。高貴な色だが鮮やかなピンクが少しはほしい。明るさ華やかさのない生活を紫朝顔の囁目に託す。

⑬ 中塚太々夫（一八八二—歿か）

明治十六年、一碧樓の兄に生まれた。均雄が本名、早大中退、岡山市内山下に開業。「無会五句集・乱礁会・水曜会」と進展。中塚一塚樓が平民新聞読者の関係もあってブラックリストに載っていた。更に俳句は「第一作・試作・海紅」と進んだ。晩年は定型自由律に捉われず悠々たる天地を傘寿を越えて歩んでいる。

孕めるがふと悲し霧の厨口

あたりは茫々たる一面の霧界である。農村で農家があちこちに点在している。居間や台所の裏は小川が流れている。その小川を眺めている私。農具や野菜を何時も洗う小川だが、今の自分は妊娠三ヶ月と医者から伝えられたばかり。昨年嫁入りしてきた私が、間もなく人妻となる。腹の中に新しい生命が宿りつつある。無心に流れる水、行雲流水に変わりは無いが、母胎に姿ゼンとしている私の廻りを一種哀調を帯びた風が吹き過ぎていった。

⑭ 中塚暫也（一八八八—一九四五）

明治二十一年玉島町に生まれた。本名謹太郎、一碧樓の妹を妻

にした。俳句は岡中時代に始める。四十年代には一碧楼と共に時代のバイロットの観があった。四十三年上京と共に中絶、大正四年に再起、その後中絶、そして昭和十年三度文壇復起。それは定型句集「渚」。結局、新傾向時代に咲き散った才能豊かな一俳人だった。戦時中、野心のため大陸を流浪したが夷らず、終戦の五月混迷の世を去った。五十八才である。

雨の花野来しが母屋に長居せり

菜の花・レンゲ等カラフルな花野にいて、急な雨に遭い、あわてて知人の家に転がりこんだ。ところが雨脚は長くしぶとくその家の母屋に長居しつとお邪魔することになった。「―来しが」の「が」は逆接で下の句に心ならずも長い滞留となったという迷惑への謝辞、につながり、叙景から叙情への推移が巧みだ。

⑮ 中塚水仙籠（一八九〇―歿か）

中塚一門の俳人、明治末より大正初にかけ活躍、明治二十三年玉島に生まれる。岡中より興談館に転校するも中退。四十三年玉島俳三昧に出席。更に「日本俳句・蝸牛・海紅」に投句、大正中「昭和初まで休俳、戦後「雲母」により定型に復帰、その後はさしたる活躍なく、宗教誌に定型句をのせている。

長兄と遺骨拾ふ日梨花哲し

長兄と遺骨を拾う日、たまたま晩春四五月頃で梨の小さく白い花が一面に目にしみる。遺族で葬式をし焼場で骨拾いをする、これは血族として最大の悲慟であろう。一方嘔目として梨の花をよ

むことにより、この花が豪華な紅・朱の花とちがって小さく目立たぬ白い花によって挽歌に当たる悲哀句として秀逸なものといえる。「―とーひーし」贅辭、副詞（日時）、形容終止。全体を通じて格調高いすぐれた哀歌である。

⑯ 井出台水（一八六五―一九五〇）

陸軍主計中将井出氏は慶応元年熊山町に二男として生まれる。本名治、明治十九年陸士卒以降軍歴続き大正六年実業界に入る。

俳句は幼くして始めたが日露戦中ホトトギス等に投句、明治四十四年東京で拍車会、久留米で篠山会、後碧氏の指導で「海紅」へ。大正期朝鮮で句会も。十年満州でアカシヤ会を、十三年「海紅」を脱退、「碧・三昧」へ入会。以後碧氏とルビ俳句を。昭和八年「紀元・白塔、十五年、新日本俳句協会」起り「白塔」代表として入会。個人句集に「台水句調」その他がある。昭和二十五年、八十四才で歿す。

一人甲板に陽を避けて荷役の音を聞く

満州行の舟行の心象風景が、高級軍人として陽の当たる場所にいて当然だろうか、所がこの句では多くの戦友の群より孤独な位置に自分を置き、陽もさけ恐らく第三国人が黙々と背中に重い荷を載せ本橋のしなる音、粗悪な靴の踏み音を聞いている。戦争への積極的な構えをよんだ厭戦歌風な孤独吟である。

⑰ 妹尾英雄（一八九二―一九四九）

生涯一碧楼と行動を共にした英雄は明治二十五年真備町に長男

として生まれた。早大理工学部卒業後、一碧楼の俳句に参加、「試作・第一作」に参加。（裏面史だが）耽美・官能の世界にも浸った。「海紅」にも参加、選句、添削で後進を指導した。世渡りは頗る下手だった。やっと鉄道の電工になれた。美雄は一生句帖を持たず専ら俳道に専念した。昭和四年伊豆海岸で波に吞まれ生涯を終わった。

かたびらの着物一領あり母老いてあり

四十過ぎにやっと電工という定職に就き、その前後定職なく、一碧楼と共に遊蕩三昧、下級の遊女と多くなじんだ。職業もなく放蕩三昧では着る物として数少なくなるのは当然だ。合わせてでなくかたびらの着物が一枚あるのみ、しかも母は古い、髪は白く、食うに食なく、孝養のかけらも出来ぬ。自由律で、初五、中九、下七で字余り多く、俗謡調の悲句である。

⑬ 西東三鬼（一九〇〇—一九六二）

三鬼、斎藤敬直は明治三十三年三男として生まれた。日本歯科医専卒、三年海外より帰国、大森で開業、八年神田共立病院に就職、九年「京大俳句」に参加、新興俳句運動のリーダーとなる。十年篠原鳳作の「傘火」の選者となる。同年結核重く「水枕ガバリと」を作る。十三年大患のため廃業、十五年第一句集「旗」刊。彈圧も深まり「京俳」所屬で特高により彈圧、後猶予。二十二年波郷らと「現代俳句協会」を作る。又誓子を動かし「天狼」創刊、以下、「夜の桃、今日、変身」を刊行。二十七年「断崖」

で後身指導、三十七年胃癌で逝去、津山市成道寺に眠る。「言葉の魔術師」。

枯蓮のうごく時きてみなうごく

緑、紅一切の色彩なく、枯渴そのものと思われる連が生動の時めぐり来って、葉に芽を出し春辭につて春の生吹きを始めた。

「動く時来て—みな動く」の表現は、春季生動を把握したもので不易句の典型である。

⑭ 塚原夜潮（一九〇〇—一九四三）

明治三十三年笠岡市に生まれた。長男で裕男が本名。大正十三年呉海軍工廠に就職、病弱に俳句への情勢を傾けた。呉に入ると呉の全俳壇に接触した。昭和二年水原秋桜子に傾倒、六年「馬酔木」の同人となった。九年「渦潮」を創刊、忽ち草城、白虹、静塔らの加入を見た。十四年、九嶺美術協会を創立、十七年「渦潮」百号を期に廃刊、翌十八年死す。四十四才。晩年は秋桜子より誓子風の方に傾いた。

夕鴨の銃声や父子の情淡く

鴨狩りに行った。陽も西に傾いて鴨も寝ぐらに帰るか、芦や葦の葉末をかすめて低く飛んで行く。鳥をねらって放った親子の銃口、父子は余り距離をおかず銃を構えているのだが、必ずしも親子の心情が融和しているわけではない。生類を殺そうする親子、その親子の日常生活での情愛が附てがち。テーマ、表現（—の—や—の—）とも非常に洗練された佳吟である。

②⑨ 武定巨口（一八八三—一九四二）

明治十六年岡山市仁王町に本名珍七、長男として生まれた。銀行マンとして三和が出来る前退職をした。明治三十七年松瀬青々に入門、終生「倦鳥」に拠った。十二年青々歿後推されて主幹になり門下を指導した。寡黙、遅吟、謙虚であったが、若年期の論戦はまことに鋭く実物の温雅さに驚いたという。晩年は「倦鳥」そのもので弱々しく十六年五十九で逝去した。

大阪の霜夜歩かん近松忌

近松忌は陰曆十一月二十六日、つまり年末である。「曾根崎心中、天の網鳥」等雄大な時代物、男女の哀情深い世話物など今に歌舞伎、浄瑠璃に現代人の胸襟をしほる。大阪が舞台のものも多く、その作中人物に身を託して霜夜の大阪を煩かむりなどして大近松のあの作この作を偲びつつ歩いてみたい。文藝忌は定家、芭蕉など数多いが一句全体に作者への共感が横溢している。美しい句だ。

②⑩ 大谷碧雲居（一八八五—一九五二）

温雅、恬淡の人、筆者は明治十八年津山市山北に生まれた。二男で本名浩、明治末美校卒後中外商業新報社に入社、最後は取締役となった。終戦時津山に疎開。俳句は明治四十年頃渡辺水巴の「曲水」の重鎮となる。津山時代「山彦」の選者もした、二十一年水巴歿後「曲水」主宰となる。二十四年上京した。二十六年には「日経」の選者へ。二十七年六十六才で死去。「碧雲居句集」

と「大谷一旬集」が三十七年までに刊行。句風は玲瓏、円満、温雅、飄然を特徴とする。

頂上の夏の青き人つまづく

故郷の津山鶴山公園のたたずまいを連想する。本丸まで登って行くと夏の盛り真青な蒼穹だ。地上より三百米余の高さだけにその抜けるような城跡より眺めるパノラマが支える紺青の空に目くらむ感じた。人々も余りにも美しく吸いこまれそうな空に見とれてついで石段につまずきよろめく。七六六の自由律句だ。

②⑪ 平松措大（一八九八—歿か）

明治三十一年長男として岡山市に生まれる。本名芳夫、京大法学部を大正十三年卒、山陽地域の中高等学校で教壇に立つ。昭和十九年退職、同時に県下の職業俳人となる。俳句は京大時草城らに師事しホトトギスに入る。大正末、「さざり」を発行、昭和七年十周年、次いで十五周年記念号を出す、二十年同人に推挙。十七年「きび」と改題、以下「措大句集、他水庵夜話、第二措大句集」を出す。三十四年四百号を出し岡山県文化賞、笠岡市文化功労者を受ける。虚子の俳風の厳しさを継承した。

颯穴の青ばんでをり夕桜

奥津につながる大釣温泉付近に数多く見られる颯穴は数百年の流石による丸くうがつた穴だ。長年月の風雪を経てその穴は蒼古の青さでくまどられていて。さてその兩岸、前方の断崖には白い夕桜が岩壁を色どっている。蒼古の造物主のえぐったこけ状の

背さ、それと調和を保つ夕桜の白彩。囁目の美に満ちる。

②③ 三木朱城（一八八八—歿か）

朱城の「旭川」は「さざり」と県下ホトトギスを二分した、明治二十一年、三男として小豆島に生まれた。家は代々医者で、本名修蔵。満鉄に入社大陸に渡る。俳句は少年期より始め、満州では「満州新聞」鳴雪選に拠った。昭和九年ホトトギス同人に推挙され、「平原、柳絮」等の選者にもなった。戦後帰国「旭川」の選者に推された。句集「ねぢあやめ、柳絮」等。又「吉備路・双魚亭雑筆」等を出版。四十五年の「旭川雑詠選集」を編み県下一の四五〇名余の集団を誇った。四十四年県文化賞受賞。

膝立てて草摘む耳輪揺れやまず

若い娘さんへの委託作であろう。数人のハイティーンのOL達が野外にキャンプに行き、レンゲなどの草を摘んでいる。各人各様それぞれの色形のイヤリングをつけている。手が動き膝も動くといやリングが妙音をたてる。初五（主述）、中七（体修・主題）、下五（述語）、情景も表現も余くすきのない佳吟だ。

②④ 竹久雨町（一八九四—歿か）

誌齡四七六号、「さざり」に次ぐ県下二の歴史を持つ「山彦」指導者雨町氏は、明治二十七年勝央町に長男として生まれた。本名豊。津中中退、県下銀行、信用金庫の長を経験した。俳句は幼期より始めたが大正十四年「山陽吟社」により「山彦」を発刊。昭和十四年「雲母」支社結成。戦後、碧雲居疎開中「山彦」を委

嘱、後「雲母」同人となる。伏見町の住居は全国より著名俳人來訪しきり。家集「須賀志野」、その句は天衣無縫のナイーブなものを秘めていた。

黒猫の子は黒猫や寺涼し

高台にあるこじんまりとした禪寺、猫を屋内で飼うのは割と嫌われるものだが、この寺では母猫が又数匹の子猫を産んだ。親猫そっくりの子猫に乳をやりつつ一匹ずつ舌でべろべろとなめてやっている。一陣の風が寺の長い廊下を吹き過ぎる。淡彩画のような素材に初・中句に何ともいえない滋味と諧謔がある。

②⑤ 森本之聚（一八八四—歿か）

松瀬青々門の後英、「越船」半世紀近く主宰、明治十七年津山市伏見町に、二男として生まれ、本名嘉一、昭和二十七年まで小松製作所に務む。俳句は十代よりホトトギス、碧梧桐選に投句、明治三十四年青々の「宝船」主宰に拠った。昭和十一年青々道を歩む。その間昭和六年金沢市の「紫苑」を「越船」と改題時主宰となる。昭和二十五年「栗の花」刊。四十三年隠退、他に「越船合同句集一・二集」もある。

桃李昔のままの田一枚

北国風景であろう。山あいの狭い傾斜を利用したこじんまりとした田が一枚ある。水田でもなく日当たりもよくない。ただこの田の脇にはかなりの年輪を過ぎた桃とすももが樹皮にコケをつけて美しい花をつけて立っている。初五（五音、体置）、中七（七

音、体修」、下五（五音、体音）初下が体音で、中七が上下への
繋辞になっている。荒靡淡彩の佳吟だ。

②⑤ 橋本魚背（一八八六—一九五五）

明治十九年滋賀県水口に、四男に生まれ、本名富三郎、大正三
年早台卒後、倉紡、昭和十四年終戦まで合同新聞社社長、同年
岡山市長になる。又「長島友の会」会長になる。俳句は早大中
書院の指導を受け、昭和初期「倉敷時報」俳選をする。それ以後は
特に「倦鳥」に精進、十二年以後俳選状態、戦後「合同俳句」の
選者、三十年岡山市内田屋敷で逝去、七十一、知友達で「魚背句
鈔」刊。その俳句風一敬虔、嚴肅、脱俗、自然随順に貫かれた。

吏となりて冬山に住むうつつなる

魚背氏は、倉紡、現山陽新聞、岡山市など広い意味の官吏の道
をほゞ一生歩んだ。たまたまこの時は山中の会社官舎にでもいた
のであろうか、折しも氷雪の季節である。長い間に及んだ都会暮
らし、ビル暮らし、そこはメカの世界であり広い人界であった。
今数人の孤独暮らし、岡に上った魚の心境で「うつつ」の、生体
をなくしたような暮らしに茫然たる日々だ。

②⑦ 谷口古杏（一八八九—一九六八）

「石楠」俳人である。明治二十二年津山市吹屋町に長男として
生まれ、本名久吉。銀行界に新聞界に進み長を兼ねた。三十七年
岡山県文化賞又津山市名誉市民更に岡山市名誉市民の榮に就く。
俳句は「石楠」に徹し、戦時中機関誌「白道」を出す。その俳風

は平明高邁、モラルに徹した人格表現といえる。又「岡山春秋」
に毎号投稿、昭和四十三年歿、墓は津山市千光寺にあり、家集に
「萩の塚句集、杏、白百合、吉備國原」を刊。句は「形よりは命
を重んじた」行き方を尊重した。

尼寺跡一羽ぎりなる山鳩啼くも

ここはその昔数人の尼僧がつつましく清貧の暮らしの中でみ仏
に仕えていた寺跡だ。そこへどこからか山鳩が一羽のみ住みつい
てくくくとう鳴いて、人や仲間を求めている。初五（六音、字余
り）、中七（七音、体修）、下五（七音、二字余り）、初下の字余
りもあって、清楚な境遇と山鳩の孤独が融合巧みだ。

②⑧ 西村燕々（一八七五—一九五六）

ほゞ半世紀岡山で句作指導と古俳諧の発掘に当たった。燕々は
明治八年大津市に長男として生まれる。本名繁次郎。大正初年来
岡中国民報の主幹となる。俳句は明治三十五年岡野氏に入門「近
江かぶら」発行。四十三年「裂帛」編集、一碧樓との親交出来、
素琴との交渉も出来た。大正七年「キリゴ」刊、自由律誌で数年
続いた。昭和初期より「唐辛子」の選者に。十一年「唐辛子句
集」（合同句集）を出す。十三年廃刊。一方、古俳諧の発掘で
「森々庵松後・吉備俳諧略史」などの労作がある。

戦後近江に帰り三十一年歿した。大津市に眠る。

大阿蘇に倦まず黄刈る男かな

大火口湖を中心に鉄道通り宿泊宿数多く、まさに阿蘇は日本一

の草原を持った円頭形の山岳である。馬がおり人がおり、それら集団が重なる時は結構にきわう。所が、今一人で贅を背負い麓に刈る男がいる。九州の屋根阿蘇に一人挑戦する男の孤独、気宇頗る大だ。

② 三宅清三郎（一八九八—一九六九）

明治三十一年、岡山市西大寺に長男として生まれる。本名久之助、東大卒後安田銀行に入る戦後銀座に画商創立、岡中頃より洋画、短歌、俳句を学ぶ。俳句は大正十一年虚子門入門、秋桜子、素十らとホトトギスの主流、東大俳句会に入る。昭和期より句力上昇—中堅に—遂に同人となる。又、彼は美術評論、隨筆を書く。三十五年「夕牡丹」（句集）、三十七年隨筆「春霜集」を出した。四十四年歿す。

切りとって重たき花や夕牡丹

夕闇迫る庭前に幾重かの牡丹が夜の世界に沈もうとしている。一枝切り取って花器に生けようとしている。真紅の花弁は切るに惜しい。遂に思い切って切る。予想していた重み、重量感が全く違う。それは両の掌にずしんと重い感触だ。初五（五音、用修）中七（体言と切れ字）下五（五音、主題）・初中二句がストリートに続き、夕色濃いい牡丹を主題として浮かび上がらず手腕は名人の句作である。

③ 皿井旭川（二八七一—一九四七）

明治四年岡山市四番町に二男として生まれる。本名立三郎。岡

中卒後医学を志し岡山医専講師となるが推され大阪市で耳鼻科の開業医となる。山口馨子が急性肺炎にかかった時、その言を信じ回復したという。俳句は大正末、虚子に信奉した。性平明温雅、ホトトギスの巻頭、上位を占め七年には同人となった。十八年「旭川句集」刊、二十二年歿す。七十七才。岡山市妙林寺に葬られた。

流れ藻をつつ放したる水馬

農家の裏口に小川が流れる。所々に洗い場、土橋、牧歌的風景である。川の流れは思いなしが緩い。水中には藻が沢山浮遊している。鯉や鯔が藻の中で戯れている。時に藻は魚や虫の活躍で切れ流れ藻となる。その近辺に水すましが泳いでいる。長い三対の脚その脚で短く切れた藻をつつ放し、下流へと押しやる。初五（対象）中七（述語）下五（主題）「—を—る—し」の流動感がまことに爽快である。

—あとがき—

①紙面の関係で、折井愚哉（高梁市）野田別天楼（長船町）安藤椽面坊（笠岡市）細木原青起（津山市）、以上四人の大家を割愛した。御了解を乞う。

②三十名につき各一句を選んだが、秀句に限ったわけでなく、その俳人の人柄、句風にふさわしいものとした。

③歿年の不明のものが多くあり、それは「山陽年鑑」で判断した。

④これにより、岡山県を代表する明治、大正、昭和四十年ごろまでの俳人の存在を知り、当時の俳風がある程度明らかとなると思ふ。
(平成二年一月二十日了)

研究室受贈圖書雑誌目録

- 文献ジャーナル(富士短期大学出版部) 第十二号
文献探究(文献探究の会) 第二十六号
文研論集(専修大学大学院) 第十六号
文林(松蔭女子学院大学) 第二十四号
武庫川国文(武庫川女子大学国文学会) 第三十四号、第三十五号
百舌鳥国文(大阪女子大学大学院) 第十号
野州国文学(国学院大学栃木短期大学) 第四十四号、第四十五号
山口国文(山口大学) 第十三号
山辺道(天理大学) 第三十四号
論究(二松学舎大学・佐古研究室) 第二十八号
論究(論究社) 第二十九号、第三十号、第三十一号
論究日本文学(立命館大学) 第五十三号
論集(大阪樟蔭女子大学学術研究会) 第二十七号
和洋国文研究(和洋女子大学) 第二十五号

(H2・12・31)

前号要目

- 源氏物語における「身」の意識―中空―なる女君―畑 佳江
元稹の「秋非我獨秋」の典拠と影響 黄 幼欣
「うたたね」と浮舟 劉 小俊
夢中山人と天放山人―「辰巳之図」の作者に関して― 石上 敏
正宗白鳥の「徒勞」における目の役割 赤羽 学
「石にひしがれた雄草」小考
―「クロイツエル・ソナタ」(トルストイ)を手掛りに― 吉田 俊彦
三島はなぜタイか―「豊饒の海」から― 下河部行輝
現代日本語文の八判断のモダリティの体系と構造について 宮崎 和人
ろう・高度難聴児の言語発達 森 寿子
―九歳の壁打破のための言語発達上の必要条件の解明―
書評・新刊紹介
大坪併治著「擬声語の研究」 太田 紘子
上村敦之著「西東三鬼物語―ある洒落な俳人伝―」 越智 悦子
工藤進思郎編「三のしるべ」 岡中 正行
大矢武師ほか共編「鑑賞 万葉集」 森長 新
三省堂国語教育賞審査委員会編「これからの国語教育」 大江 佳男
太田東雄ほか編「日本昔話通観」第9巻 赤尾 裕久
江戸文学年誌の会編「89江戸文学年誌」 井上 啓治
水田 潤編「近世文芸史論」 長島 弘明